

北米開拓・植民の実態と植民地 時代から18世紀前半に至るアメ リカ産業の発展過程を概観して

—— その一 ——

社 河 内 一 郎

本拙稿を綴るにあたりまずお断りしておきたいことが若干存するので、これを列記しておきたい。私は非才ながら多年にわたって、北米開拓・植民の実態に関してその具体相を追跡し、極めて限定された史料と相組み、しかもその余りにも多い未解明点の実存に驚きつつ今日に至ったのであるが、第一に主題に関連して先きに当学研究論集15・16合併号に、“プリマス植民地開拓の経緯とこれを経済的側面より眺めて。”と題し拙文を投じているので、本稿の記述にもその前半の一部はかなり重複せざるを得なくなっていること。第二に私は経済史的分野は所謂直接的専門外のため、この面の記述は簡素かつ常識的に走らざるを得ないこと。第三に本稿組成にあたり、近年公刊された鈴木圭介編“アメリカ経済史(1975,東京)”の極めて具体的な論述が甚だ適切かつ有用と思考されるので、これを十分参照し随所に該著内容を引用させて載いていること、及びやや古典的と思われるが神野璋一郎・宇治田富造著、“アメリカ資本主義の生成と発展(1950,東京)”などからも若干の引用を受けていること、第四に West Indies の開拓・植民及びこれとアメリカとの産業・貿易の関々係は稿数の都合でこれを割愛したこと、第五に17世紀に大西洋岸の Fall Line、18世紀に入って Alegeny 山脈地帯に達し、かの Frederick Jackson Turner の説くように、アメリカ資本主義・民主主義の発展が19世紀末迄の Frontier 西進史即ち、Westward Movement と相依存してアメリカ的特性を培養した Frontier の存在及びその展開なる Frontier の問題も稿数の関係上割愛したこと、第六に本稿全般を通じて若干の問題提示の段

階に止まらざるを得なかったこと、第七に主題の面から記述中、幾何かの重複点を生じていること、第八に未熟の粗稿故、文中、矛盾或は誤謬・独断・偏見の数々もあろうかと思われるが、将来大方諸賢の御叱正・御教示を賜わりたいなどなどの諸点である。

尚、本稿中、アメリカと記した所は、主としてアメリカ合衆国を指したものである。

ところで、17・18世紀の植民地時代に於て、尚、イギリスの重商主義的植民地政策の下に立ち、世界市場は勿論、国内市場さえ与えられなかったにもかかわらず、経済生活の現実性に伴い植民地時代の開拓農的生活から世界最大の富裕国家となりこれを世界史的に捕えればかの Allan Nevins の言に見るように、アメリカ史の潮流は民族史の過程を顕著に示現するもので、アメリカ史こそ帝国主義・民族主義・民主主義・宗教・自由平等・科学・拓植事業など史的諸勢力の決定的影響を受容したものと解すべく、そのアメリカは明らかに拓植地として出発し、独立革命によって民族的独立と市民革命を遂行し、資本主義体制へ向ってその歩を進め、未達成の市民革命は生活・価格・商業・科学など諸革命の第二次市民革命によって完了し、アメリカ資本主義機構が確立するに至ったとされている。この過程に於て、鈴木は大要次のような課題を提起した。即ち、(1)アメリカ経済史の潮流の時代区分として、一般的に独立革命と第二次市民革命をとり上げるが、これらは市民革命の重要時点に該当する故で、近時これら諸事件の意識を過小評価する向きもあるがこれには同意し難い。(2)アメリカが所謂後進国家から出発し、急激な発展によって資本主義国家に成長した過程を見る場合、アメリカの技術的進展の経過を一方法としてとり上げる場合が存するが、社会革新の問題を除き技術採用の年表的比較をもって資本主義の展開過程を把握することは不可能である。(3)アメリカにおける近代農業の方向は、Town System によるものである。西部は自由地を基盤に、中西部は北部の影響下に開発されたが、南部では奴隷制の採用によって資本主義体制の前進を阻害した。この南部勢力打破のためには北部と西部との力関係を顧慮すべきではなからうかと。そして、これらの諸点には少な

からぬ魅力を感じるものが存するので、それらも配慮しつつ稿を綴ってみよう。但し本稿に於ては、その主題に示すようにアメリカの植民時代からほぼ18世紀前半迄と時代限定を行っているので、記述はこの範囲内に止めたい。

さて、アメリカ新世界の発見は周知の通り、1492年を発端とする四次にわたるイタリア出身、Christoforo Colombo の Caribbean Sea の探険に始まるとされ、これは広く人口に膾炙するところであるが、実は伝説的・物語り的には、1000年頃既に北欧の勇敢な船員達は鱈魚を求めて北米東北部なる Newfoundland 地域へ達したと言われ、史実的には Colombo に続いた同国人なる Giovanni Caboto 及びその子、Sebastian Caboto の蘇国王、James III の特許による新世界の黎明が訪れたとされている。即ち、1496年、時の英国王、Henry VII から北米大陸の東部・西部及び北部のすべての方面に陸海を問わず航行を認可された Cabot 父子は全キリスト教徒の名に於て未知の異教徒と無信仰者の島・国及び地域・地方を探求し、英国々旗の掲揚を条件に開拓地の交易独占権を付与され、Cabot の航海は Colombo と同様 Island 或は Cipangu へ至る Northwest Passage を開発し、インド諸国に近接して香料取得のため交易植民地の樹立を志向することであった。Giovanni Cabot は Mathew 号に18名の拓植者を乗せ、1497年5月某日、英国西岸の Bristle 港を出帆、北西航路をとって52日後、St. Lawrence 河口へ至る Cape Breton 島を発見 {Charles Austine Beard & Mary Rita Beard: A Basic History of the United States (1944, N. Y.)}, 同年6月24日、北米北東岸なる Labrador を認め次年始めには Newfoundland 島へも到達している {Samuel Eliot Morison: The Oxford History of the American People (1965, N. Y.)}。そして、Cabot は1498年8月6日、Bristle 港へ帰還したが、北大西洋1,860マイルの航程を僅々15日間で走破したことになっている。以上のように、Cabot の行動には理解し難い点も存し、史料難もあって Cabot の上陸地点は推定の域に限定され、殊に往路の航海に関しては不詳の面が多い。然し、北米開拓史上における彼の地位は極

めて重要なが故に、彼の航海に関する実証の検討は現在迄種々試みられてはいるがその成果は未だしの感である。ところで、Giovanni Cabot は同年、再度当地域への航海を企て、Greenland島の東西兩岸を探検し、さらに北米東岸を今日のChesapeake湾近傍迄南下したと見られるが、遂に英国へ帰着し得ずその実態は全く未解明に終っている。まず北米大陸へのヨーロッパ人の進出は16世紀末葉のNewfoundland沖漁業から開始されたとするのが常識的であるが、その後拓植者達が3,000マイルの経済を蹴ってこの新大陸に新たな植民国家を確立することは決して容易な業ではなかった。しかも、北方東岸New Hampshire地域から南方東岸Georgia地域迄でも延々1,300マイルに及び、その1/3は森林をもって覆われ、山川・沼沢・草原も巨大な規模を持ち未開の荒涼たる景観を露呈し、南北の寒暖較差は著しく、加えてその住民は未だ石器時代の鬪争的な蛮人だった。然し、このような幾多の障害にも関せず拓植者達に於てはこの大陸こそ天恵的な居住家屋で即ち、“開拓者における幸福の地”であり、1607年のVirginia植民地の建設者なるJohn Smithは言っている、“天と地がこのように巧みに調和して人々の居住地を作ったことはない。”と。さらに、自らNew England沿岸を探査し、この地域が拓植地として甚だ有望な点を強調している {John Smith: Virginia, New England, Summer Island (1584-1624)(1624, London)}。ところで、北米大陸は凡そ三角形状をなす巨大大陸で、最大幅員は 26°N と 55°N の間に所在し、平均的に見てその風土は健康的だった。渡来者はこの地に小麦・らい麦・からす麦・人蔘・玉葱や豆類60種を植え、しかも新たな食料として当地特有の農作物、とうもろこし15種類と馬鈴薯を原住民から入手することが出来た。また、沿岸には魚類が豊富で、狩猟用動物にも恵まれ後には貴重な鉱物資源も見出されるに至った。次にこの大陸は大西洋岸に多数の湾や入江を抱き所謂南北性の地貌を呈するが、拓植者のWestward Movementは東西線に沿って展開され、即ち、St. Lawrence河と五大湖は東西に走る水路で、Ohio峡谷も同一線の方向をとる水路だった。そして、Ohio峡谷の支配者はやがてMississippi流域のそれであり、さらにこれは必然

的に西方全域の支配者たる運命を担っていたのである。加えて、拓植者に於て幸運な点は、北米大陸の Indian はその数も少なく (Indian の定住は Colombo の渡来より25,000年前とされる。尚、16世紀におけるアメリカ大陸の原住民の総数は100万人とも推計されている。)しかも、彼らは甚だ未開で、従って植民地建設の重大な障壁とはならなかったことである。彼らは屢々拓植民を襲いその開発を遅延させたが、決して坐折させることはなかった。当初ヨーロッパからの拓植者がこの地に達した時、Mississippi 流域以東に居住し、農・牧を主生業とした Indian の人口は20万人以下と推定され {Allan Nevins & Henry Steele Commager: The Pocket History of the United States (1942, N. Y.)}, Mexico 以北の全大陸で50乃至60万人を越えなかったことは確実視されている。“世界で知られる最も優れた野蛮戦士”と呼ばれた Indian の武器も棍棒・弓矢・斧類に過ぎず、従って上質装備のヨーロッパ人集団に敵対し得るものではなかった。しかも、Indian は自然界の活用に拙劣で、狩猟と漁業のみに依存したためその生活資源は乏しかった。現在、Mexico 以北には59種・500部族の Indian の存在が認められている {尚、Lewis H. Morganによれば、南米 Indian を加えて70種とする {Lewis H. Morgan: The Ancient Society (1877, N. Y.)}。この Indianこそ拓植者への最大恩恵者で、彼らは Indian から特有の開墾・耕作・施肥・増穫や食糧の貯蔵法などを学びとったのである。これは、かの Faulkner の指摘する通り然りである {Harold Underwood Faulkner: American Economic History (1950, N. Y.)}。そして、この Indian と拓植者との闘争は長期に及んで反復されるが、18世紀初頭迄の代表的なそれをごく簡潔に摘示すれば凡そ次の通りである(順不同)。(1) New England 人の Massachusetts 地域における対 Pequot 戦争。1637年。Pequot 族は、Connecticut 峡谷の Mystic 河畔で全滅。(2) Virginia 人の対 Powhatan 戦争。1630年。Powhatan 軍敗退。(3) North Carolina 地域における Tuscarora 戦争。1711年。独国系スイス人が New Bern で攻撃を受く。(4) Plimoth 人の対 Wanpanogua 戦争(Philip 王の戦争)。16

75—76年。英国人多数(2,000人)戦死。(5) South Carolina 地域における Yamassee 戦争。1715—28年。Yamassee 族と Creek 族との相互抗争。この戦争の初期のみでも拓植者100人の死者を出している。ここで注目すべきは、英語を母国語とする拓植者達にとって Iroquois 連合は友好的で後年、英国拓植者が対仏戦争を展開した時、拓植者が Indian の積極的援助を享受したという点であった。さて、次に進んで愈々新大陸に渡来したヨーロッパ諸国民の開発・拓植の実態についてその大要を考察してみたいと思うのであるが、その前にそれら諸国民の植民の動機乃至目的を眺めれば、まず英国の場合は、宗教的・経済的・領土的もしくはそれらの総合と種々の説は存するが、やはり第一には経済的動因が中心的だったと見るべく、Samuel Eliot Morison の指摘するように、(1)人口過剰を来した英国は、生活困窮者と失業者を海外へ輸送するの要に迫られ、(2)英国は毛織物市場が入手で、Indian の毛皮・獣皮を毛布・外套と交換する要あり、(3)英国は貴金属が必要で、Espagnola と同様 Virginia 地域にも金発見の可能性が存した。(4)英国は従来、地中海沿岸諸国の乾葡萄・葡萄酒・オリーブ油購入のため多額の出資を行っていたが、もしこれらの諸物資が新大陸に生産すれば当然英国経済の安泰をはかり得るものである。(5)英国は Protestant キリスト教を拡大すべく、先住拓植民の Catholic 改宗を阻止せねばならぬ。万一英国々内で宗教変革やこれに随伴する内乱の勃発を来せば、アメリカ植民地こそ安全な避難所たり得るであろうと考えられ、それこそ実に一世紀半に及ぶ英国植民地樹立の基本的要素と見なし得るであろう {Samuel Eliot Morison: The Oxford History of the American People (1965, N. Y.)}。次に、西・仏・和各国の場合は、その絶対主義政治体制の下に、封建的土地所有関係を植民地へ移植せんと試みたものであった。

その一 ヨーロッパ諸国のアメリカ植民地拓植の実態

- (1) Spain 新大陸におけるスペインの交易植民地と移民植民地の開発

は、1519年-21年のスペイン人の Mexico 征服から始まり、1539年には Hernando de Soto は Florida 半島へ上陸、1541年には Mississippi 流域へ到達した。そしてさきに1519年には Mexico で、1531年には Peru で始めて金銀鉱山を発見した。この植民者を Encomenderos と呼び、貿易商人・冒険家・軍人らから組織されていた。彼らは8,000-9,000の部落に居住する1,500万人の Indian を支配し、その理想とするところは南米大陸に所在すると伝えられる伝説的な“El Dorado”を探求することで、鉱山に於ては多数 Indian の強制労働が実施され、鉱山業は初期スペイン植民地の経済的基盤をなすものであった。特に銀は本国産のオリブ・無花果・ワイン・織物・鉄や水銀と交換される重要物資だった。次に植民地の土地は、主として本国の貴族や軍人が領有し、農業にあつては California, Florida, Mexico 諸地域の中南米に Encomienda なる封建的大土地所有制を本国から誘導し、1571年にはスペイン人々口160,000人の中、Encomienda 制土地所有者は実に4,000人にも及んでいる。そして、この方式によって本国は植民者に土地の使用権と農奴化した Indian への強制労働賦課権を承認したが、土地への支配権は全面的にこれを本国が掌握し、Indian の共有地を植民者が所有することを禁じたのである。さらにまた、金銀鉱山の開発は、“土民の絶滅と Indian 及び黒人の隷属化ならびに鉱山の埋没”なる激烈性をもって強行し、かつまた、本国はその取引商品に平均15%の輸出入税を賦課し、植民地産の金銀は1/5以上を本国々王に献納するよう義務づけたため、一時的としても本国は異常な繁栄を招来し、これによって16世紀後半から17世紀前半に至るヨーロッパ世界へ価格革命を誘発し、ヨーロッパ諸国における近代的生産様式形成の一条件をなした。尚また、スペインは拓植各地に広大な牧場を営み、家畜を飼育し、さらに砂糖・ココア・バニラ・藍を多量に収穫し、これによって本国は巨利を占めたが、植民地庶民層は甚だ貧困で商業や工場経営を忌避し、確かにスペインの植民地経営はあらゆる角度から見てその適性を欠いていたと言わねばなるまい。

(2) France フランス人の北米大陸近海への接触は1,000年頃から始ま

るとの伝説的な物語りも存するが、一般的には最初の発見・航海はフランス国王, François I の援助を受けたイタリア人なる Jovanni Welrazar の1524年の West Indies - 現在の New York - Hudson 河 - Naragansett 湾 - Cape Cod を迂回 - Nova Scotia - Newfoundland の航海からとされる。もっとも、その前1510年, フランス海港都市の小商人が装備不十分かつ小規模の船隊をもって長駟 Newfoundland へ到達, 1518年には Sable Island へ至って植民地を開発したとも伝えられるがその実態は全く不詳である。さて, フランスの Bourtagne 地方出身なる Jacques Cartier は, 先ず 1533・1535 の両年にわたって Labrador 地域を探険 {Emile Salomon Wilhelm Herzog Maurois の Histoire des Etats Unis (1943, N. Y.) 及び岩波西洋人名辞典によれば, 1534・1536の両年となっている。}, 自ら命名した St. Laurence 河を発見, これを遡航して Indian の一部落なる Hokeraga (現在の Montreal) へ至り所謂, “Quebec の岩蔭” に止まった。彼は1541年-1542年, 10隻の船舶をもってこの地へ来航, Sagnay 河流域に拓植を試みたが完全に失敗に終わっている。ここで愈々フランス国王, Henri III の時, フランスの探険家・軍人だった Samuel de Champlain が登場する。“New France の父”と仰がれ, 自ら動植物の挿絵を加えた北米東岸の航行と内陸探険の実情を描いた “Voyages (1613)” を記述した彼は1604年, Nova Scotia で Port Royal (現在の Anapolis 入江)の町を興し, 1608年, Quebec 地域へ赴きその地の Indian, Huron 族及び Argoncan 族と交友を結び, ここに Quebec 交易地即ち, New France 植民地を樹立した。尚, フランス植民地は後年, Louisiana 植民地或は Fur 植民地とも呼称された。ちなみに, 後に Robert Cavalier de La Salle なる者が Mississippi の流域及び河谷はフランス国王, Louis XIV の所有と主張し(1682年4月9日), この地方を Louisiana と命名したのである {David Hawke: Colonial Experience (1966, N.Y., Kansas City)}。ところで, フランス拓植者の求めるものは魚類特に鱈と毛皮だったが(居住者の1/3以上が毛皮の蒐集・輸送に従事していた。), その開拓地は寒冷かつ荒涼,

その生産性は低く、しかも拓植者は St. Lawrence 河、五大湖、Wisconsin や Mississippi の諸川を経て専ら内奥地帯へ進出、旧教を墨守し、本国の中央集権制に依存し、開拓農民は封建的貴族の下に酷使を受ける実情で、従って植民地の基盤を堅実に設定することは不可能だった。要するに、フランス拓植民は貧弱な農村を若干建てたのみで、無謀な土地の奪取に走り植民地の経営・企業に関して全く無力だったと言わざるを得ない。かくして、情勢は甚だ不振で1660年の人口も僅かに3,000人に過ぎず、特殊商事会社なる Hundred Associates の手で開始されたこの植民地も1663年には遂に王領植民地化するの運命を辿ったのである。

(3) Holland 1609年、Hudson が Hudson 河を遡航した頃、オランダ人はこの地域を New Netherland と呼び、オランダ人による拓植地の本式的開発は1614年の New Amsterdam (1664年に命名された後年の New York) の Trading Post に開始され、続いて1621年の Dutch West Indian Co. の手により船長 Cornelis May なる者により Wilmington 要塞が築かれ Christina と命名され数軒の住家と一軒の穀物小屋が建てられ、New Amsterdam の地に早くも三十家族の Wallon 人が定着するに至った。そして、1622年に交易所の設けられた Albany と1626年、60グルデンをもって Indian から購入した交易所 Manhattan 島の海港が毛皮取引の中心をなしたのである。1629年に入ると、大土地所有と小作農制に基づく Patroon System を採用して開発にあたったが、これは1629年6月7日付の Charter of Freedom and Exemptions による4ケ年の間に自己出資で拓植地に年令15才以上の農奴となる移住民50名以上を渡來させた Dutch West Indian Co. の株主に対して航行可能の海岸或は河岸に片岸の場合は幅員16マイル、両岸の場合は同じく8マイルをもって奥行き無制約の土地を付与し、その受領者なる Patroon は土地への領主権とそれに伴う海洋の漁猟の権限・織物取引の独占権・司法権・Township の設置権及び8ケ年の免税権を持ち、これによって Hudson 流域には、Patroon System なる大土地所有制を形成したのである。即ち、拓植初期に於てオランダ植民地は Mohawk 流域から Long Island, Delaware 地

域海岸へと拡大され、New Netherland で行なわれた農業経営も会社の所有地に農器具を用いて同社の使用人が農耕に従事するといった形態で、Patroon System を導入するに至った次第である。然し、オランダの拓植地拡大策は、本国からの移住民の僅少なことやその土地政策が自由土地保有農民を無視したことや会社に拓植地経営の人材を欠如したことなどから失敗に終わった。しかも、本国派遣の植民地総督は歴代殆んど無為無策、加えてオランダは1652年から20年余りに及ぶ3回にわたる Angle - Dutch War を惹起して敗退、この間1664年の Breda 条約によって New York はイギリス領となり、この植民地は本国の名挙革命のため自治権を獲得する迄イギリスの支配下におかれたわけである。当時の植民地人口、15万人の中、New Netherland の居民は8,000人に過ぎなかったとも記録されている。

(4) England 16世紀、イギリス国王、Elizabeth 女王時代の Sea Dog (Sea Rovers) の活動から海上投資事業は巨利を収めると見たイギリス投資家は未知のアメリカ世界へ異常な関心を寄せ、イギリス人自らによる New England 植民地の創設を意図するに至った。この Sea Dog の著例として、Francis Drake は1557年-80年に南米東岸を南下し、さらに西海岸を48°N迄北上して California 沿岸に達し、諸都市やスペイン船の強奪によって純益60万ポンドを取得している。ところで、Drake の航海・探険は、先覚者なる Humphrey Gilbert が1576年に発表した、“Discourse of a Discovery for a New Passage to Cathaia.” による Cathaia 行の航路を見出さんと企図したのもでもあった。彼は Squirrel 号以下4隻の船舶をもって1583年、Newfoundland 島の St. Johns 港へ入り、始めてイギリス人としての足跡を印した。続いて女王の寵臣、Walter Raleigh はイギリス植民政策の根幹となった Charter を所持して2隻の船舶に100名の拓植者を乗せ現在の北 Calorina 州沿岸なる Roanoke 島へ進出、重ねて1587年、3隻の船舶をもって117名の男女・子供をこの地へ派遣(この員数は150名との説もある。)、さらに1589年、Roanoke 島へ食糧船が送られたが拓植者の姿は全く消失し、世に“Roa-

noke 島の悲劇”として語り伝えられている。そして17世紀に入ると、前述のように Hudson が Hudson 河を発見、Manhates 島・New Amsterdam を建設、さらにイギリス商人、Dualey Digges の援助で Hudson 湾に到達、該地域におけるイギリス植民地の基盤を築いたのである。さて、自由移植民によって開拓された交易植民地を志向するイギリス人のアメリカ植民地建設の組織的・体系的な最初の企画は1606年のイギリス国王、James I の特許即ち、一般に Virginia と呼称される(34-45°N の地域)地方への1606年4月10日付の South Virginia (34-41°N の範囲)及び North Virginia (38-45°N の範囲)への第一 Charter を根拠とする Virginia Co. of London (後の Virginia Co.) と Virginia Co. of Plymouth による Virginia 植民地の建設だった。前者は London 及びその近傍の投資者により、後者は Plymouth 及びイギリス西部の投資者によって成立し、また両会社のアメリカ植民地拓植の目的は、当時中南米地帯におけるスペインの開発成功によって示唆を受けた金銀鉱山の打開と東洋世界への貿易路の開拓にあり、尚、これらの Chartered Co. は商業資本が企業の独占体制を保持するため絶対主義体制の国家から Charter の下付を受け、その庇護を求めざるを得なかった情勢から生誕したものであった。

(1) Jamestown 植民地(南 Virginia における London 植民地、Old Dominion と呼ばる。) (Corporate Colony)。時は1606年12月某日、一般に“戦士中の紳士”とも言われた Gentlemen と Common People から成る120名の拓植者が(航海中、39名死亡。) {David Hawke: Colonial Experience (1966, N.Y.) では144名となっている。} Christopher Newport の指揮で London Co. の船舶、Good Speed 号、Southern Constant 号及び Discovery 号三隻をもって17週(28週の説もある)の航海後、1607年4月26日、Chesapeake 岬を望見し、低湿地なれど華麗な草原、天を覆う樹海、清澄な水流を発見して5月14日、Hampton Road へ入港、上陸し、草葺家屋・教会・倉庫を建て交易所を開設し、ここに、Jamestown 植民地が樹立された。尚、別に Plymouth Co. の Ferdi-

nando Gorges が1607年某月某日、詳細は不明なれど Kennebec 河口の島、岩漿地帯なる Sagadahoc を開発し、同年8月18日、George Poham を指揮者とする120名の拓植者が2隻の船舶をもって来着、St. George 要塞を築き、教会・倉庫と十五軒の丸太小屋を建てたが、やがて一行の志気は沮喪、44名を残して本国へ帰還し、かつ当時は殊の外の厳寒で陸地・河谷も氷結し、植民地造成は成功しなかった。次年1月某日、前述の Christopher Newport が120名の拓植者を率いてこの地を訪れたが生存者僅かに38名、半歳後の人口は104名だったが、その中、51名は疾病や飢餓のため死亡するという惨状だった。同年、Newport は70名(120名の説もある)の移住民をもって再度来航したがこの中には5名のポーランド人を含み、彼らはガラス工・ピッチ油工・タール工などの技術者だった。ともあれ、イギリスは開拓の当初から外国人を自己植民地から排除するというスペイン方式を用いなかったが、これは植民地経営上注目をひくところである。さらにまた、Edwin Sandys なる者が Virginia Co. of London から Virginia 地域における“特殊開拓地”に対する Charter を1622年頃取得、Hudson 河口へ到来、植民地建設のため150名の拓植者をもって鉄工場を建設し、ドイツ人をして製材所をフランス人をして製塩所を開かせ、West Indies から綿糸・甘蔗・レモン・オレンジ・パイナップルを、Bermuda 島から馬鈴薯を、イタリアから蚕を輸入して交易兼漁業植民地を開発しようと試みたが、資金調達のため London の高利貸商人から借財せざるを得ず、これも亦成果を収めることは不可能であった。さて、1619年の Virginia 地域の人口数は2,000人と見られるが、続いて1628年9月6日、Merimac 河の北方3マイルから Charles 河の南部3マイルの土地を下付された John Endicott が50乃至60名の拓植者をもって Naumkeag へ到達、この地を Salem と改称し、1629年6月末日頃には5隻の移住民船が400頭の家畜を伴って来航、引続いて1630年6月12日、John Winthrop が11隻の船舶、900名の拓植者をもって Salem に来着、ここに漸く Jamestown 植民地の基礎が確立されたのである。ところで、Virginia 地域への拓植民は普通4ヶ年の期限つきで渡航費10万

至12ポンド(7乃至10ポンドの説もある。)の支払いを条件とする全渡航者の約1/3を占める Indentured Servant であったが、彼らの勤労による生産物は集産制方式によって Co. の所得となるため1616年に至って廃止され、代って Headright System が採用された。これは植民地居住者への土地の無償貸与に関して、家族数の外、年季奉公人・奴隷及び家畜数を基準とするもので、1612年に West Indies から導入、煙草栽培に始まる Plantation と対応して南部の大土地所有制の基盤をなしたものである。

(2) Plimoth 植民地 さきに1593年、イギリス北東部に居住した Separatist 集団は国教の強圧を忌避し、信仰の自由を求めてオランダへ移住、1607年、Scrooby 集団(Pilgrim Fathers) 100名も John Robinson, William Brewster や William Bradford らの指揮下に1617年、両者の大多数は新天地への移住を決意し、ある者は Guiana 方面へ、他の者は New York 地方を願ったが、終局的には多数の者は新大陸なる Virginia 方面を志向するに至った。1620年、彼らは先ずイギリスの Plymouth へ至り、London へ到来した100名の者と合体し、最後に102名の者が1620年7月6日、Mayflower 号一船で Plymouth 港を出帆、65日間(64日間とも言われる。)に及ぶ悪天と難航に苦闘を続け1620年11月9日、後年 James 岬と呼称された Cape Cod (42.5°N)へ到来、同年12月11日、Plimoth Rocke へ上陸、同月25日には最初的小屋を設営、所謂 New Plimoth 植民地の開設に着手したのである。然し当年冬季、彼らは厳寒に襲われ寒気と飢餓に悩み、1621年初頭には生存者僅かに50名という惨状だった。然し、彼らは忍苦よく悲運に堪え Indian の耕作した土地を再開拓し、とうもろこし・えんどう・小麦・大豆類を栽培し、夏季には七軒の居住用小屋と四軒の小屋を建造し、ビーバーの毛皮を貯蔵し、畠地には相当の作物を実らせることに成功した。尚、Plimoth 西部に居住していた Indian, Wanpanoag 族が友好的だったことも、拓植者には甚だ幸運だった。たまたま当時、London 商人なる Thomas Weston が35名の拓植者を伴い Fortune 号で来航、彼らは1621年6月1日付の Charter を New England Council から入手したが、これには拓植者各人に100エ

一エーカーの土地を、公共建造物には1,500 エーカーの土地を付与するとあり、時の Plimoth 植民地第二代総督、Bradford は植民者の必要度に対応して土地の配分を実施したがその具体的内容は不詳である。尚、New England における土地分与の方法は家族を単位とし、一家族の所有地は平均的に20乃至80ヘクタールとも言われ、小規模ながら平等主義の土地所有制で中世イギリス Manor の変形した村落共同体即ち、Town System によるものだった。然し、その後の Plimoth 植民地は依然として食料難に脅え、加えて Indian 来襲の不安にさらされて繁栄せず、1630年の Town の数は22、1642年におけるその数は10、その人口は3,000人に過ぎず、1691年を迎えると、宗教的迫害からの脱出と利潤追求を目的とし、最初の Charter を1628年、John Endicot ら5名に下付した合資貿易会社の手になる Massachusetts Bay Colony に併合されるのであるが、当時の植民地人口は7,000人だったと言われる。そして、イギリスで近代社会形成の中核をなした人達即ち、農夫・商人・医師・教師・弁護士・実業家・牧師や職人らが家族単位・地域単位の方法で、1630年-1640年の Puritan Exsodus なる大移住を企てたことにより(渡航者は20,000人、渡航回数は1,200回と言う)、New England 植民地の基礎は固定するに至った。さらに、1641年には50,000名のイギリス人も渡来し、1641年にはその人口1,000,000人にも達し、独立革命前夜の所謂建国十三邦植民地の総人口は2,500,000人にも及んだのである。ところで、ここで一言 Town System について触れてみれば、これは Town への貢献度による無償方式の民主的平等主義の土地所有制であるが、この語は本来 Angle-Saxon の Tun に出る“垣”の意。中世 German の村落共同体なる Mark (ドイツの Genossenschaft) にあたり、植民地当初の Town は農・牧・家内工業兼営の自給農民によって1630年、現在の Boston 南方海岸に建てられたものである。Town の土地は36平方マイルの広さで、Town は地方自治制の中心をなし、村落か十字路の小家屋群を持つ農村的自治区であり、その中核は Town Lot で、教会・学校・集会所も設けられた。Town は Town Meeting によって統治されるが、これは Puritan 的社会契約思想

に出るもので、独立革命の頃西部農民の団結に果した役割は至大であった。またこの Town の中から自然発生的に展開される局地的分掌の進展した農村工業が局地的再生産圏を植民地各地区へ生み出し、イギリス旧体制植民地機構ではその包容が不可能となり独立革命への重要な経済的要因を形成したのである。次に、Town の土地開墾法は草原・牧地・沼沢・森林などの Uplands and Meadow を配分して農耕する分割耕地制をとったが、これは土地の私有化で農民の共同体的態様を消失させ独立自営農民を成立せしめる要因ともなった。また共同地域を個人所有制に分割する場合、当初から Proprietor と New Commer との間に相剋が底流し、土地所有者の中に土地投機業者が介在する場合彼らは広大な土地を独占し、しかも共同分割の際莫大な土地を独占することがあった。尚、Town の交易活動も活発で、上質布地・家具・塩などは Town から各植民地の個人所有地方面へも売却が行われていた。さて次に進んで、特に魅力的な面は拓植者達の遠洋漁業に関する活動であるが、簡略ながらその実態を考察してみよう。Plymouth 植民地の Pilgrims や Massachusetts 湾植民地の Puritan 達は渡来後直ちに小型船(50名乗り組みの200トン船)を建造し、遠洋漁業船隊を組織して外洋へ送った。当時沿岸港なる Boston, Salem や Marblehead は重要漁港として繁栄し、漁獲した高級魚類は南欧旧教国家へ下級魚類は West Indies の黒人奴隷に向けて輸出された。特に遠洋捕鯨業は広汎な海洋に及ぶ漁民4,000名以上の積極的企業として展開され、Massachusetts 湾地帯では殊更重要産業の地位を占めた。かの Edmund Burke が1775年、拓植者の自主独立性に対して理由なき干渉を企てないよう警告した声明の中で、特に抹香鯨を主体とする捕鯨業に関して次のような指摘を加えているのは余りにも著名な事実として伝えられているので、その一節を引用すれば即ち、“New England の人々が最近捕鯨業に従事する状況に着眼せよ。彼らは氷山群に突進し、Hudson 湾や Davis 諸島の最奥の地なる氷結地帯に迄進入して北極圏に達するかと思えば、一方彼らは既に南極圏の寒冷水域へも入り、凍結した南天に蛇星座を仰ぎ鋭意活躍中と聞く。また、赤道直下の炎熱も両極千古の氷雪と

同じく彼らの勇気を坐折させるものではない。彼らの中にはアフリカ海岸に止まって鋸を投ずる者あり、また南下して Brazil 沿岸に巨大な獲物を追跡する者もある。如何なる天候の下にも彼らの勤労的勇姿を見出さぬことはない。勤勉なオランダ人も敏活なフランス人も、イギリス人の堅実かつ巧妙、しかも聡明な企業精神もこれら新人達の進出した限界に迄かかる危険な事業を完遂することは不可能だった。また、この新人らは弾力性に富む豊かな心身を保有していた者である。{Emile Salomon Wilhelm Herzog Maurois: Histoire des Etats Unis (1943, N.Y.)} と。ともあれ、かくして先覚者の指摘するように、1660年頃にはイギリスの拓植地は、大西洋岸に於ては南方 Virginia 地域から Annapolis, Maryland 方面へ及び、Delaware 河に沿って Philadelphia に至り、Hudson 溪谷、Long Island Sound, Maine 地方迄の New England 沿岸を包括し、1763年には New England 沿岸地帯のみで1,500,000人を擁する植民地へ成長した。そして、1789年にはイギリス植民地人が Alegenys 山脈の西方地帯へも進入する事態ともなった。かかる間に、イギリス植民地は漸次発展して18世紀前半、北米大陸の大西洋岸地域には、New Hampshire (1679年成立)・Plymouth (1620年同)・Massachusetts (1630年同)・Connecticut (1662年同)・Rhode Island (1663年同)・New Jersey (1664年同)・Delaware (1682年同)・Pennsylvania (1681年同)・Maryland (1634年同)・Virginia (1607年同)・North Carolina (1729年同)・South Carolina (1670年同) ならびに Georgia (1733年同) の所謂建国十三邦植民地の成立を見たのである。かくして、ヨーロッパから渡来した多様多種の拓植民、詳しくはイギリス・スコットランド・アイルランド・ドイツ・ポーランド・ボヘミア・ポルトガル・イタリア・オランダ・フレーミング・ワルーン・フランス・デンマルク・ノルウェーならびにスエーデン人らによってアメリカ植民地が形成され、ここに渾然一体をなした“アメリカ人”の生誕を見るようになった。然らばこの American とは一体どのような人間か。これに関しては、フランスから渡来した一農夫なる Michel Guillaume Jean de Crèvecoeur の記

述した“Letters from an American farmer (1782)”に如実に物語られているところである(当学研究論集11号, 拙稿。アメリカ人とは何ぞや——クレブクールの説を再読・味読して)。また, アメリカ拓植者の社会的・経済的性格に関して, Benjamin Franklinが一節ながら明快な解説を試みているのでそれを引用してみよう。即ち, Franklinは1760年, “アメリカ移住志望者のための情報”の中で記述する。“事実この国アメリカにはヨーロッパ貧民のような悲惨な人達は殆んど存在しないが, またヨーロッパで富豪と呼ばれる程の人々も極めて少数である。一般的な人と言えばむしろ余り不満を感じない生活を営む通常人である。大土地所有者も殆んど存しないが, 借地人も僅少である。多数人は自らの土地を耕作するか或はある程度の手工業や商業に従事し, 絵画・彫刻・建築その他の美術作品に対して, ヨーロッパに見るような高額の金銭支払い可能な富裕人は皆無である。自国に生計手段を持つ人々は有利な職を求めてこの国へ移住することは無意味である。また, 自己の家門以外に自己展開の可能な素質を欠如する者へは到底この遠隔地へ出かけることを勧めるわけにはゆかない。何故ならアメリカ人とは異邦人に接すれば, “そもそも如何なる人物か。”とは問わず, “如何なる能力を具備するか。”と糺す人間だからである。これを要するに, アメリカとは労働の世界で決してフランス人の言う飽食の国ではあり得ない。”と。Franklinは, 拓植民の適格条件として新大陸の農園で労働なる方途を理解し得る者或は他の職業を持つ意欲的な青年層若しくは中層階級の一般人を期待していたものと考えられる次第である。

さて愈々本稿を結ぶにあたり, 次に若干の問題点を提示しておきたい。

(1) New EnglandにおけるTown成立の前提となったTown Commonsは, 植民地の実質的樹立とともに漸次私的所有化され, それはまた同時にIndianを征圧し, 彼らの所有地を収奪する過程だったとされるが, その具体的検討は今後の課題である。(2) Townは封建的社会機構の基盤としての共同体とはならなかったが, それはTown居住者の階層的に内包される所謂近代性と彼らが独立・自由の自営農民を志向していたためと見られるが, この外にはその要因は見出せないものであろうか。

(3) Original Guarantees 或は Original Purchasers なる Town 農民は植民地の本来的土地所有者で、土地の受領や未分解の土地・草原や森林の入会権を所持していたが、New Comers は先取的共同地の利用は承認されず、Town Commons のみにその入会権を限定されたが、これは生活上の受益に恵まれない土地故、その居住民の蒙る平等主義的恩恵は当然僅少と見られるが、その具体的度合いは如何であろうか。(4)16世紀或はそれ以前の北米大陸及びその周辺海諸島の拓植に関しては、何分時代も古く史料も乏しいという難点もあり、未解明点もかなり多く現存するが、当該専門の諸文献に於ても拓植史に登場する諸人物の生存年代や植民地交易所乃至各植民地成立の年代などを仔細に点検する時、そこに相当数の相違・矛盾を見出すのであるがこれは如何ように判じたらよいであろうか。例えば、以下列挙の諸史料を比較してもその事例は余りにも多数に及ぶ次第である。

Samuel Eliot Morison : The Oxford History of the America (1965, N.Y.) David Hawke : The Colonial Experience (1966, N.Y., Indianapolis, Kansas City) Charles Austin & Mary Rita Beard : A Basic History of the United States (1944, N.Y.) Allan Nevins & Henry Steele Commager : The Pocket History of the United States (1942, Washington) 高木八尺 : 米国政治史序説 (1931, 東京) 神野璋一郎・宇治田富造 : アメリカ資本主義の生成と発展 (1950, 東京) 鈴木圭介・アメリカ経済史 (1975, 東京) 高村象平 : アメリカ資本主義発達史 (1952, 東京) 石浜知行 : アメリカ資本主義発達史 (1949, 東京) 小原敬士 : アメリカ経済思想の潮流 (1951, 東京) 京都大学文学部 : 西洋史辞典 (1958, 東京) 岩波書店編集部 : 岩波西洋人名辞典 (1956, 東京)